

地域とのかかわり
紹介します!

施設・事業所の 地域活動 レポート



No.10 株式会社ラインシステム デイサービス WAN STYLE

所長 知花朋弥



琉球リハビリテーション学院作業療法学科卒業。高知県の病院（外来リハビリテーション・訪問リハビリテーション・デイケア）で作業療法士として約3年間勤める。沖縄へ戻り、訪問看護・特養で作業療法士として勤め、2012年から5年間デイサービスの管理者を務める。その後、退職し、2017年に居宅介護支援事業所と通所介護を開業。主な活動としてイベントや映画を通して、沖縄県内の介護職員の「やりがい」と「学ぶ意欲」を高め、「個人の資質向上」と「介護職のイメージアップ」を図る活動を実施している。映画「つむぐもの」沖縄事務局代表。介護職員交流イベントentraide（アントレッド）代表。

デイサービスWAN STYLEの紹介

当施設は、沖縄本島中部に位置する沖縄市にある、定員20人の通常規模のデイサービスです。沖縄市は、那覇市の次に大きな街で、「エイサー」と呼ばれる沖縄の伝統的芸能が盛んです。

当施設名の「WAN STYLE」の「WAN（わん）」は、沖縄の方言で「自分」を意味します。当施設は、「利用者が自分らしく生きがいをもって人生を全うできること」を理念としています。そのため取り組みとして、デイサービスで過ごす1日の活動内容を利用者自身に考えていただきます。朝の体操、マシンによる運動、トレーニング器具の使用なども、利用者が自分らしくいられるため、そして自分の決めた目標を達成し、夢を叶えるためにはどのような機能訓練が必要なのかを利用者に主体となって考えて

デイサービスWAN STYLEの外観





いただきます。その目標や夢は利用者一人ひとりさまざまです。

長期入院により下肢の筋力が低下していた70歳の男性利用者は、「また歩行器を使用せず歩けるようになって、できるだけ早く働きたい」という目標がありました。男性は朝の40分の体操の後、私たちが提案した機能訓練メニューのスケジュールを自ら立てて、それを休むことなく次々と取り組んでいっていただきました。その結果、3カ月後には歩行器を使用することなく歩行が可能となりました。現在では、デイサービスに通っているほかの利用者に「この運動は足に効くんだよ。自分もこれをやってたら歩けるようになったよ」などと実際の効果や方法などを話し、それを聞いたほかの利用者の意欲向上につながりました。

また、認知症があり、身体的には立位時に膝の痛みが心配な女性利用者は「大好きな料理を続けたい」という夢がありました。この女性には朝の体操による立ち上がり運動、膝痛緩和のための下肢のマッサージ器具を積極的に使っていただき、午後は料理活動に参加していただきました。デイサービスで料理を始めた当初は、新機種のIH調理器具の扱いに戸惑ったり、立ち仕事による疲労感を訴えたりすることもありました。しかし、今ではしっかりと立って手際よく料理を作り、それをほかの利用者がおいしそうに召し上がるのをご覧になって、とても満足そうな顔をされています。

私たちのデイサービスは、今までの「寝たりきや認知症を防ぐための機能訓練」「高齢者の孤独を防ぐための交流」「家族の介護負担の軽減」といった画一的なサービスを行うのではなく、利用者個々の多様なニーズに応え、利用者がいつまでも自分らしく生きがいを持ち、地域の一員として尊重されるような生活を送ることができることを目指しています。

地域の特徴や課題

昔から沖縄は、小さな島ゆえに近所付き合いや親戚付き合いが欠かせません。同居率も他県と比較して非常に高く、3世代が一緒に生活し、子育てや介護の面でも家族同士が協力し合ってきました。また、沖縄では家族以外に対しても「イチャリバチョーデー（一度出会ったら皆兄弟みたいなもの）」という言葉があるように、心温かく迎え入れ、面倒を見るという精神が代々受け継がれ、自然と地域全体で人々が交流し、助け合ってきたのです。しかし、年々沖縄の産業形態や個々のライフスタイルの変化、離婚率の増加に伴い、核家族や高齢者の単身世帯が急増し、家族間、さらには地域間のつながりも薄れていったのです。地域間のつながりが薄れていく一方、沖縄は気候が温暖で都市部に比べて住みやすいことから他県からの移住者が多く、年少人口と呼ばれる子どもの数が全国と比較して圧倒的に多いのも現在の沖縄の特色と言えるでしょう。将来の沖縄を担う子どもたちの教育、人材育成を学校や家庭だけでなく、地域全体で行うことが将来の地域の活性化の大きな原動力となることは言うまでもありません。

地域におけるサービスと今後の活動

●WAN STYLEと移動販売パン屋のコラボカフェ

当施設の扉を開けると、まずホテルのラウンジのようなアジアンテイストのソファとサイドテーブル、それを囲む観葉植物、そして、挽きたてのコーヒーが味わえる自動コーヒーマシーンが目に入ります。当施設に見学にいらした方は口をそろえて「デイサービスじゃないみたいですね。お洒落なカフェみたい」とおっしゃいます。介護施設では、低いソファは立ち上がり時に足腰に負担を掛けやすく、敬遠されがちです。しかし、当施設ではあえて低い位置から立ち上がるという日常生活動作が、機能訓練につながると考えて設置しています。

このカフェのような開放的で居心地のよい空間をデイサービスだけでなく、子どもから高齢者までたくさんの地域の人々が交流し、ふれあえる場所として活用できないかと考えたのが、移動販売のパン屋とのコラボカフェです。営業は週1回、デイサービスの利用時間が終わる15時45分ごろから17時30分ごろまでの約2時間です。その時間に移動販売のパン屋に当施設に来ていただき、私たちはコーヒーを無料で提供しています。

施設としては、飲食の場所の提供はもちろん、看護師による血圧測定、健康相談、体調チェックなどもカフェに寄ったついでに気軽に行えるようにしています。ほか

移動販売パン屋とのコラボカフェ



コーヒーの無料提供



コラボカフェの概要



には、デイサービスで使用しているマッサージ器具やエアロバイクなどのマシンの無料開放もしています。カフェを始めた1カ月はなかなか周知されず、たまたま通りかかった方がパンを買って帰られるだけということが多かったのですが、今では地域包括支援センターや他事業所、周辺地域にチラシを配り宣伝した結果、地域包括支援センターの多職種の方々が集まって話し合いをする場所として使用していただいています。また、地域のケアマネジャーが担当者の家族と共に施設見学にいらしたり、徐々に人が集まるようになると、自然と近所の方も「ここは何の施設なんですか？」と興味を持ってくださるようになりました。エアロバイクを体験した近所の方に「デイサービスではいろいろできるんですね」と、デイサービスの実態を知っていただける機会となっています。カフェの利用者は高齢者だけでなく、出産のために里帰りしている妊婦さんが友達といらっしゃったり、保育園の帰りに立ち寄ってくださった親子など年齢層もさまざまです。



カフェを始めて数カ月、カフェに来るお客様と話をしていると、「簡単な軽作業やボランティアの募集に関する情報が知りたい」ということが分かりました。自分自身の通院や家事、家族の介護、そして孫の世話などで定期的に決まった時間の仕事は難しいが、空いた時間があれば少しでも働いて、世の中に役立つことがしたいという思いを抱く方が多いのです。

ある日、週2回の清掃業務のアルバイトをこなしている80歳の女性が、地域包括支援センターの紹介でカフェを訪れました。女性は一人暮らしで近くに身寄りもなく、アルバイトがない日は家で寂しく生活しているという話をしていました。また、家で一人で暮らしていると、認知機能の低下も心配だから外に出て何かしたいという漠然とした思いもありました。そこで、当施設の清掃や食器洗いなどの軽作業をボランティアで依頼したところ、気持ちよく引き受けてくださいました。女性はアルバイトのない日は、午前中に施設に来て、本人の希望でもある体操をほかの利用者に行った後、食事前のテーブルの清拭、食事の支度や食器洗いなどの軽作業をしていただいています。女性は腰痛があるので、水のたっぷり入ったパケツを持ち上げるのは難しいので、それはスタッフが担当しています。しかし、それ以外の場面では、トイレの場所が分からない利用者をトイレまで案内したり、麻痺があってテーブルの上の物がなかなか取れない人にそっと物を取って差し出したりして、徐々に自分ができることを見つけ意欲的に働けるようになりました。私たちは女性のその働きにより、利用者とかかわる時間を増やすことができるとも助かっています。女性はこのボランティア活動を通して「何をするのも勉強になります。この歳になっても何が役に立てることがあるんですね。実は私は昔、看護助手をしていたのよ」と、懐かしくもどこか誇らしげに話しておられました。

高齢者は社会的弱者ではありません。ボランティアに来ている女性のように、重い物は持てる人が持ってあげるといった小さなサポートで、本来持っている知識や豊富な経験を十分に地域の中で生かすことができるのです。「まだまだ働きたい、自分でも何か役に立てるのではないか」という高齢者の思いを地域につなげる架け橋となり、地域全体の活性化を図ることがこのカフェの役割だと考えています。引き続きカフェでは「働きたい高齢者」と「高齢者が活躍できる場所」の募集を行っていく予定です。ほかにも、カフェではフリーマーケットの開催も予定しています。自分の畑で採れた野菜を余らせている方、自宅で趣味の手工芸品を作っている独居の高齢者などが出店を希望されています。併せて、いらなくなったおもちゃや子どもの衣類なども募集することで、子どもから高齢者までたくさんの地域の方が集まれるようなフリーマーケットにできれば、より活発な地域の交流を図れるのではないかと期待しています。

●未来を担う子どもたちへ

当施設では、学校法人から依頼される職場見学や介護職についての講話を積極的に受け入れています。介護職は「3K（きつい、汚い、危険）」と悪いイメージを抱かれやすい仕事です。しかし、高齢者に必要とされたり感謝されたりすることに大きな喜びと誇りを持っている現場の介護職員の話聞いて実際の様子を感じてもらいたいと思っています。介護福祉士だけでなく、地域で働く医療従事者、地域包括ケアを担うケアマネジャーや相談員などの他職種とどのように連携し高齢者を支えているかを学び、将来の就職や地域での活動に役立ててほしいと思っています。

今後の課題

週1回の2時間程度のカフェタイムだけでは、まだまだ限られた人々の交流にとどまっているのが現状です。今後はこのWAN STYLEという場

所が地域にとって「住民の声が直接届く、実際に顔が見える」身近な存在となり得るために、カフェ時間以外にも普段から自治会をはじめとする地域組織、教育機関、一般企業とも連携を図り、地域全体の交流の機会を増やしていくことが課題です。

患者・利用者一人ひとりに寄り添った「自立支援」をマネジメント!

退院・退所・卒業後を見据えた “触らないリハビリテーション”の 具体的な実践方法

山田 剛氏 やまだリハビリテーション研究所 所長／作業療法士

プログラム

1. 診療報酬・介護報酬同時改定で変わってきたリハビリ専門職に求められる役割
2. 患者・利用者の在宅での生活を見据えたりリハビリテーションの必要性
3. コーヒーを飲んだり洗濯物を干したりするのはリハビリテーションか?
4. 触らない状態での評価が「触らないリハビリテーション」の第一歩!
5. 患者・利用者自身が「できること」「できないこと」を知る過程の重要性
6. 目標設定の妥当性と目標到達度合いの定期的な確認作業を患者・利用者!
7. 患者・利用者の「ADLが改善したのはなぜ?」にきちんと答えられますか?
8. 「触らないリハビリテーション」によるリハビリテーション実施計画書の作り方
9. 病院でもリハビリテーションマネジメントで多職種・多事業所との連携促進を!
10. 多職種・多事業所に対しリハビリテーションの視点をいかに助言するか?
11. 患者・利用者の自宅訪問でリハビリ職は何をどのようにアセスメントする? ほか

大阪 18年 9/22 (土)
田村駒ビル

名古屋 18年 12/8 (土)
日総研ビル



東京 18年 12/9 (日)
日総研 研修室 (廣瀬お茶の水ビル)

参加料 本誌購読者 15,500円
税込 一般 18,500円

[時間] 10:00~16:00

学習のねらいは